

教師・友人の愛着機能が学級適応感に及ぼす影響
— 第一養育者への愛着スタイルに注目して —

石塚 将也, 久保田 愛子

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第72号 別刷

2022年3月

教師・友人の愛着機能が学級適応感に及ぼす影響 — 第一養育者への愛着スタイルに注目して —

Effects of Attachment Function of Teacher and Friends on Subjective Adjustment to Classroom: With a Focus on Attachment Styles to Primary Caregivers

石塚 将也[†], 久保田 愛子[‡]
ISHIZUKA Masaya and KUBOTA Aiko

概要

本研究では、小学校4-6年生を対象に、第一養育者への愛着スタイルと担任教師・友人を対象とした愛着機能が学級適応感に対して、いかなる関連を示すかを検討した。階層的重回帰分析を行った結果、愛着スタイルと愛着機能のいくつかは学級適応感の高さを予測したが、その関連の大きさには性差がみられた。また、女子に関しては、学級適応感に対して、第一養育者への愛着スタイルと担任教師・友人を対象とした愛着機能との間の交互作用効果もみられた。

キーワード: 愛着機能, 学級適応感, 愛着スタイル, 児童期

1. 問題と目的

愛着とは、危機的状況あるいは不安喚起時などに特定他者にくっつき得るという見通しのもと、その他者から保護してもらえるとという信頼感を基礎にした特定他者との間に築く情緒的な結びつきとされ（遠藤，2005），すでに新生児期に原初的な形で存在し，成人から老年に至るまで存在し続けるとされている（Bowlby, 1988 二木他訳1993）。

乳幼児期に母親を代表とする第一養育者との関りによって愛着が形成され，個人の愛着スタイルが出来上がっていく。このように愛着を形成する対象のことを愛着対象といい，愛着対象との間で交わされた過去及び現在の相互作用に基づいて内的作業モデルというものが作られる。内的作業モデルとは，自分の周りの世界がどのようなものであるか，母親や重要人物がどうふるまうのか，自分自身がどうふるまうのかといった，自分の周りの世界や愛着対象，そして自己に関する心的な表象モデルである。これらのモデルによって，人は種々の出来事を知覚し，未来を予測し，自分の行動の予測を立てる。そしてこのモデルは，特定の愛着対象だけでなく，他の人との関係性においても一般化されていくと考えられている。なお，いったん作られたモデルは，無意識かつ自動的に働き，現実の方をモデルに合うように解釈していくため，一般的に内的作業モデルの固定性は徐々に増していく傾向があるとされている（遠藤，2005）。これによって，子どもは周囲の人的環境が変化すると内的作業モデルを基に新たな人間関係を作っていく，第一養育者とは別の特定他者との間に愛着関係を階層的に築

[†]大田原市立金丸小学校北金丸分校

[‡]宇都宮大学共同教育学部（連絡先：a-kubota@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

いていく (Bowly, 1969/1973 黒田他訳 1976/1977)。

児童期における愛着対象について調査した研究では、愛着対象として上位に挙げられることが多いのは両親、兄弟姉妹、友人であり、特に高学年では友人の順位が高まってくるが示されている (村上・櫻井, 2014)。しかし、別の研究では、教師についても、児童が愛着対象として認める可能性が指摘されている (藤田・森口, 2015)。児童期において個人は、生活の多くの時間を学校で過ごし、その中でも学級で過ごす時間が多くの割合を占める。すると、学級において愛着対象となりうる教師、友人との関係性は重要なものとなる。

個人は愛着対象に「近接性の維持」、「安全な避難場所」、「分離苦悩」、「安全基地」と呼ばれる4つの愛着機能を向ける。村上・櫻井 (2014) によれば、「近接性の維持」とは、密接な関係を探し、維持しようとする事、「安全な避難場所」とは、知覚上、あるいは現実の危機に直面した際、安心や安らぎを求めに行く事、「分離苦悩」とは、分離に抵抗し、苦悩すること、「安全基地」とは、未知なる挑戦や学習といった周囲の環境への探索行動に従事する際に、アタッチメント対象によって送り出されることと定義される。同研究では、愛着機能はソーシャル・サポートとも中程度～強い相関が認められることが示されており、これらの愛着機能をどれだけ認めているかは個人と緊密な他者との関係性の質を示す一つの指標とも考えられる。

では、個人の愛着スタイルや教師、友人の愛着機能は学級での児童の生活の中でどのような影響を及ぼすのだろうか。そこで予想されるのが学級への適応感との関連である。適応とは、個人と環境の関係 (近藤, 1994) や個人と環境の調和 (大久保, 2005) とされている。個人が環境とどのような関係にあり調和しているかは、本人の主観的な評価と他者からの客観的な評価によって捉えられる。すると、学校または学級に適応しているということは、主観的にも客観的にも児童生徒が学校または学級生活を肯定的に捉えており、かつ学校また学級側からの要請にも適切に応えている状態、およびその状態に至る過程であると定義される (原田・竹本, 2008)。これに対し、適応感とは、適応そのものを意味する概念ではないが、主観的な評価として個人の適応の一指標と考えることができるとされている (谷井・上地, 1994)。

これまでの愛着と適応感に関する研究では、第一養育者への愛着スタイルと学校適応感との関連が検討されてきた。たとえば、中学生を対象として親への愛着および教師・友人への満足度と学校適応感の関連を調査した研究がある (林田・黒川・喜田, 2018)。それによると、親への愛着の安定性が学校適応感を予測することが示されている。また、小学生を対象とした先行研究においては、母親への愛着の安定性が学級満足度や学級生活意欲などの学校適応感に関係することが示されている (中尾, 2020)。

しかし、学級における愛着対象である教師・友人との関係性において、愛着機能の影響を検討したものはない。中学生を対象とした研究では、教師への満足度、友人への満足度が学校適応感を予測することが示されているが (林田・黒川・喜田, 2018)、愛着という危機的な状況という限定された場面での教師や友人との関係性の質が、いかに適応感と関連しているかは明らかでない。

また、林田・黒川・喜田 (2018) の研究では、親への愛着と教師・友人への満足度の交互作用が学校適応感に与える影響についても検討しているが、これは中学生を対象としたものであり、愛着スタイルと教師・友人との関係性の交互作用について、小学生を対象とした研究は見られない。個人の愛着スタイルは一般他者との関係性を築く基となる内的作業モデルと影響しあっていることから、小学生においても愛着スタイルと第一養育者以外との関係性の交互作用を検討することが必要であると考

えられる。特に小学生は、第一養育者である場合の多い両親を愛着対象として上位に位置付けていることから(村上・櫻井, 2014), その交互作用がより重要な意味を持つ可能性がある。

なお、中学生を対象とした、友人への信頼感が学校適応感に与える影響について検討した研究では、信頼感の中で友人の頼もしさが女子のみで学校適応感に正の関連を示しており(中井, 2016), 適応感と友人の関係性との関連に性差があることが中学生においては示唆されている。性差によって学級への適応感に影響する要因が異なるとすれば、適応感を高めるための方法を男女で分けて考えることが重要になると考えられる。

以上から、本研究の目的は、小学生を対象に教師・友人の愛着機能が学級適応感に及ぼす影響について検討することとする。その際、第一養育者への愛着スタイルと教師・友人の愛着機能の交互作用の影響も検討することとし、分析は、性差による違いを検討するために男女に分けて行うこととする。

林田・黒川・喜田(2018)の研究において、中学生では親への愛着の安定性や教師及び友人への満足度が学校適応感に正の関連を示すことが示されていることから、本研究においても第一養育者との愛着の安定性が学級適応感に正の関連を示すことが予想される。また、担任教師及びクラスの親友の愛着機能を認めるということはその関係性に満足しているとも考えられることから、ここにも正の関連があることが予想される。さらに、中井(2016)の研究から、性差においては女子の方が友人との関係性が適応感に与える影響が多いと考えられるので、本研究では、男子よりも女子の方が友人の愛着機能が学級適応感に大きな関連を示すものと予想する。

2. 方法

調査対象者

対象者は、栃木県の2つの小学校に通う小学4年生118名(男子56名, 女子62名)と5年生143名(男子66名, 女子77名), 小学6年生127名(男子65名, 女子58名, 不明4名)の計388名(男子187名, 女子197名, 不明4名)であった。明らかに質問内容を理解せずに回答しているアンケートがないか確認したものの、特に見受けられなかったため、388名全員を分析対象とした。

調査時期・調査手続き

令和2年7月に各学校長にアンケートを依頼し、それぞれの学校の担任の協力のもと、実施した。本研究は、宇都宮大学ヒトを対象とした研究に関する倫理審査委員会の承認を受けて実施した(登録番号H20-0018)。各学校長への依頼の際には、研究計画の目的、意義、方法、個人情報保護の方法、安全管理への配慮などについて十分説明するとともに、対象者に対する同意に関しては、アンケートが無記名自記式であるという特徴を加味し、児童の回答を持って同意とすることを確認した。あわせて児童に対しても、調査の前に、調査は学校の成績とは関係がないこと、回答は匿名のものであること、回答の途中で答えたくなくなった場合には回答を飛ばしたり、中断したりしてよいことを説明した。

質問項目

(1) 第一養育者への愛着

はじめに、第一養育者に当てはまる人物を「お母さん、お父さん、おばあちゃん、おじいちゃん、その他」から選んでもらい、その人を思い浮かべながら回答してもらった。評価項目が多くなることで、回答者である児童に負担をかけないように、中尾・村上・数井(2019)による、児童版ECR-RSを用いて測定した。愛着回避についての6項目と愛着不安についての3項目の計9項目を「あてはまらない」

から「あてはまる」の4件法にて実施した。

(2) 担任教師と親友の愛着機能

村上・櫻井(2014)による、児童用アタッチメント機能尺度を用いて測定した。学級における愛着対象としては、クラスの担任の教師とクラスで一番仲の良い友人を設定した。両者に対して愛着機能の下位尺度である「近接性の維持」、「安全な避難場所」、「分離苦悩」、「安全基地」についてのそれぞれ3項目、計9項目を「あてはまらない」から「あてはまる」の4件法にて実施した。

(3) 学級適応感

江村・大久保(2012)による、小学生用学級適応感尺度を用いて測定した。下位尺度である「居心地の良さ感覚」についての5項目、「被信頼・受容感」についての4項目、「充実感」についての6項目の計15項目を「まったくあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」の4件法にて実施した。

3. 結果

(1) 記述統計量と相関係数

性差による分析を行うため回答者を男女に分け、各尺度について、項目の単純平均による得点を算出した。 ω 係数は愛着回避が男子($\omega=.795$), 女子($\omega=.763$), 愛着不安が男子($\omega=.737$), 女子($\omega=.759$)ともに許容範囲であり、それ以外の尺度では.837-.956でいずれも良好であった。Table 1 に各尺度の ω 係数と記述統計量を、Table2に相関係数を示した。

Table1 男女別の各変数の記述統計量

	男子			女子		
	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	ω	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	ω
【養育者への愛着尺度】						
1.愛着回避	1.875	0.716	.795	1.648	0.599	.763
2.愛着不安	1.821	0.880	.737	1.836	0.912	.759
【担任の愛着機能尺度】						
3.近接性の維持	2.802	0.869	.910	3.105	0.834	.920
4.安全な避難場所	2.383	0.906	.837	2.553	0.906	.847
5.分離苦悩	2.765	1.050	.956	2.967	1.016	.933
6.安全基地	2.882	0.879	.892	3.083	0.842	.887
【友人の愛着機能尺度】						
7.近接性の維持	3.689	0.540	.865	3.810	0.451	.885
8.安全な避難場所	2.674	1.056	.908	3.131	0.909	.917
9.分離苦悩	3.472	0.784	.927	3.639	0.645	.889
10.安全基地	3.296	0.845	.884	3.456	0.761	.895
【学級適応感尺度】						
11.居心地の良さ感覚	3.417	0.700	.929	3.312	0.766	.940
12.被信頼・受容感	2.842	0.856	.889	2.841	0.768	.898
13.充実感	3.255	0.732	.890	3.312	0.671	.884

Table2 男女別における各変数の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
							女子						
【養育者への愛着尺度】													
1.愛着回避	-	.361 **	-.098	-.275 **	-.064	-.238 **	-.191 **	-.321 **	-.079	-.281 **	-.322 **	-.365 **	-.347 **
2.愛着不安	.282 **	-	.080	-.113	.145 +	.072	-.077	-.212 **	.054	.016	-.239 **	-.283 **	-.197 **
【担任の愛着機能尺度】													
3.近接性の維持	-.169 *	.086	-	.549 **	.751 **	.757 **	.289 **	.164 *	.205 **	.341 **	.346 **	.237 **	.315 **
4.安全な避難場所	-.263 **	.055	.521 **	-	.528 **	.604 **	.102	.486 **	.112	.283 **	.314 **	.442 **	.365 **
5.分離苦悶	-.175 *	.203 **	.654 **	.516 **	-	.706 **	.122 +	.164 *	.364 **	.301 **	.281 **	.234 **	.240 **
6.安全基地	-.166 *	.256 **	.777 **	.605 **	.744 **	-	.188 **	.227 **	.252 **	.447 **	.367 **	.337 **	.463 **
【友人の愛着機能尺度】													
7.近接性の維持	-.159 *	.008	.308 **	.227 **	.270 **	.293 **	-	.391 **	.550 **	.622 **	.414 **	.275 **	.434 **
8.安全な避難場所	-.145 +	.009	.218 **	.515 **	.229 **	.290 **	.439 **	-	.320 **	.523 **	.404 **	.510 **	.417 **
9.分離苦悶	-.134 +	.102	.296 **	.297 **	.515 **	.381 **	.491 **	.366 **	-	.651 **	.260 **	.263 **	.356 **
10.安全基地	-.107	.086	.359 **	.356 **	.350 **	.479 **	.560 **	.546 **	.586 **	-	.395 **	.417 **	.507 **
【学級適応感尺度】													
11.居心地の良さ感覚	-.225 **	.004	.442 **	.354 **	.407 **	.475 **	.377 **	.312 **	.239 **	.278 **	-	.503 **	.705 **
12.被信頼・受容感	-.288 **	-.088	.374 **	.321 **	.265 **	.343 **	.224 **	.289 **	.111	.196 *	.592 **	-	.602 **
13.充実感	-.168 *	.026	.457 **	.388 **	.452 **	.523 **	.352 **	.294 **	.249 **	.382 **	.807 **	.644 **	-

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

(2) 階層的重回帰分析

親への愛着、教師・友人の愛着機能およびそれらの交互作用が学校適応感に及ぼす影響を検討するため、HADを用いて学級適応感の下位尺度である居心地の良さ感覚、被信頼・受容感、充実感を従属変数とした階層的重回帰分析を行った。step1では、愛着の二次元および、学級における愛着対象である担任教師とクラスの親友の愛着機能を独立変数として投入した。step2では、愛着の下位尺度（回避・不安）と担任・友人の愛着機能の各下位尺度の組み合わせの交互作用項を独立変数として投入した。本研究では、林田・黒川・喜田（2018）と同様に、要因やその組み合わせが増えて解釈が困難になることを避けるため、また、愛着不安と回避がそれぞれ独立に学級適応感に作用することを想定するため、3次以上の交互作用は扱わないこととした。なお、独立変数は中心化した上で分析を行った。

その結果、男子では（Table 3）、step1を見ると、学校適応感の下位尺度である居心地の良さ感覚に対しては、担任の安全基地からの β が最も大きく（ $\beta = .337$ ）、友人の近接性の維持と友人の安全な避難場所の標準偏回帰係数（友人の近接性の維持 $\beta = .285$ ；友人の安全な避難場所 $\beta = .231$ ）も5%水準で有意となった。被信頼・受容感に対しては、友人の安全な避難場所からの β が最も大きかった（ $\beta = .306$ ）。充実感に対しては、担任の安全基地からの β が最も大きく（ $\beta = .331$ ）、友人の近接性の維持の標準偏回帰係数（ $\beta = .243$ ）も5%水準で有意となった。しかし、step2においては、交互作用項を含め5%水準で有意なものは見られなかった。

女子では（Table 4）、step1を見ると学校適応感の下位尺度である居心地の良さ感覚に対しては、友人の安全な避難場所からの β が最も大きかった（ $\beta = .204$ ）。被信頼・受容感に対しては、友人の安全な避難場所からの β が最も大きく（ $\beta = .263$ ）、愛着回避の標準偏回帰変数（ $\beta = -.178$ ）も5%水準で有意であった。充実感に対しては、担任の安全基地からの β が最も大きく（ $\beta = .421$ ）、友人の近接性の維持の標準偏回帰係数（ $\beta = .217$ ）も5%水準で有意となった。

step2においても5%水準で有意なものが見られた。居心地の良さ感覚に対しては、愛着回避の標準偏回帰係数（ $\beta = -.179$ ）が5%水準で有意となった。また、愛着不安と担任の安全な避難場所の交互作用項（ $\beta = -.330$ ）が5%水準で有意であったため、単純傾斜分析を行った（Figure 1）。その結果、愛着不安が高い児童は、担任の安全な避難場所が居心地の良さの感覚と有意な負の関連を示した。さらに、愛着不安と担任の安全基地の交互作用項（ $\beta = .347$ ）も5%水準で有意であったため、単純傾斜分析を行った（Figure 2）。その結果、愛着不安が高い児童は、担任の安全基地が居心地の良さ感覚と有意な正の関連を示した。そして、愛着不安と友人の分離苦悩の交互作用項（ $\beta = -.262$ ）も5%水準で有意であったため、単純傾斜分析を行った（Figure 3）。その結果、愛着不安が高い児童は、友人の分離苦悩が居心地の良さ感覚と有意な負の関連を示した。

Table 3 男子の学級適応感に対する各変数の階層的重回帰分析

	居心地の良さ感覚		被信頼・受容感		充実感	
	step1	step2	step1	step2	step1	step2
	β	β	β	β	β	β
愛着回避(A)	.038	.067	-.142	-.157	.067	.038
愛着不安(B)	-.028	-.036	-.052	-.112	-.012	-.037
担任の近接性の維持(C)	.074	.120	.149	.179	-.016	.003
担任の安全な避難場所(D)	-.045	.021	.004	.045	.026	.061
担任の分離苦悩(E)	.006	.013	.108	.042	.083	.105
担任の安全基地(F)	.337 *	.258	.050	.140	.311 *	.249
友人の近接性の維持(G)	.285 **	.222 +	.111	.087	.243 *	.205
友人の安全な避難場所(H)	.231 *	.171	.306 **	.270 +	.088	.072
友人の分離苦悩(I)	.111	.162	-.232 +	-.123	-.072	-.047
友人の安全基地(J)	-.153	-.050	.012	-.026	.147	.218
A×B		.081		.118		.058
A×C		.118		.053		-.072
A×D		.262		.226		.205
A×E		-.120		.000		.014
A×F		-.095		-.427 +		-.133
A×G		.029		-.151		-.101
A×H		-.085		-.066		-.033
A×I		-.113		-.063		-.078
A×J		.254		.369 +		.209
B×C		-.049		.035		-.050
B×D		-.207		-.037		-.124
B×E		-.148		-.084		-.080
B×F		.168		.179		.090
B×G		-.119		-.033		.050
B×H		.145		.118		.155
B×I		.071		.081		.076
B×J		-.130		-.138		-.141
R^2	.386 **	.464 **	.246 **	.331 *	.384 **	.430 **
ΔR^2	.386 **	.077	.246 **	.085	.384 **	.046

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

β : 標準偏回帰係数, R^2 : 決定係数

Table 4 女子の学級適応感に対する各変数の階層的重回帰分析

	居心地の良さ感覚		被信頼・受容感		充実感	
	step1	step2	step1	step2	step1	step2
	β	β	β	β	β	β
愛着回避(A)	-.094	-.179 *	-.178 *	-.203 *	-.106	-.133
愛着不安(B)	-.132	-.009	-.114	-.049	-.092	-.004
担任の近接性の維持(C)	.066	-.037	-.034	-.023	-.116	-.183
担任の安全な避難場所(D)	-.009	.000	.194 +	.173 +	.129	.113
担任の分離苦悩(E)	.044	.098	.021	-.087	-.141	-.034
担任の安全基地(F)	.216	.215	.067	.133	.421 **	.348 **
友人の近接性の維持(G)	.176 +	.130	.043	-.012	.217 *	.100
友人の安全な避難場所(H)	.204 *	.188 +	.263 **	.237 *	.088	.092
友人の分離苦悩(I)	-.100	-.145	-.028	.009	.118	.092
友人の安全基地(J)	.034	.050	.121	.088	.053	.113
A×B		-.101		.012		-.128
A×C		.074		-.301 +		-.212
A×D		.197		.108		.156
A×E		.032		.317 *		.007
A×F		-.192		-.225		.220
A×G		.303		.449 *		.476 **
A×H		-.281 +		.028		-.353 *
A×I		.203		-.315 *		-.085
A×J		-.118		.084		-.053
B×C		-.083		-.004		-.018
B×D		-.330 **		-.001		-.148
B×E		.004		-.247		.022
B×F		.347 *		.272 +		.012
B×G		-.161		-.278 +		-.138
B×H		.266 +		-.002		.175
B×I		-.262 *		.098		-.040
B×J		-.101		.003		-.048
R^2	.300 **	.429 **	.398 **	.491 **	.422 **	.510 **
ΔR^2	.300 **	.129 +	.398 **	.093	.422 **	.088

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

β : 標準偏回帰係数, R^2 : 決定係数

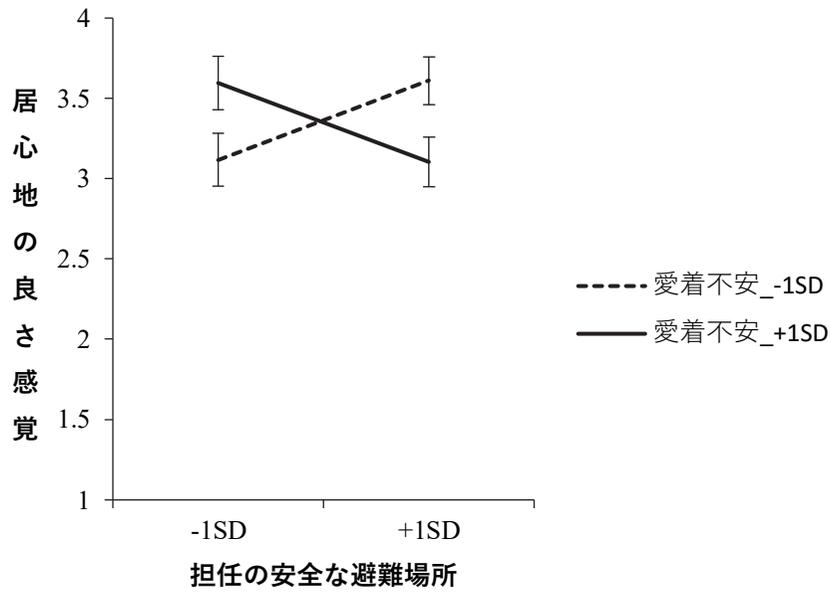


Figure 1 女子の「居心地の良さ感覚」への「愛着不安」と「担任の安全な避難場所」の交互作用

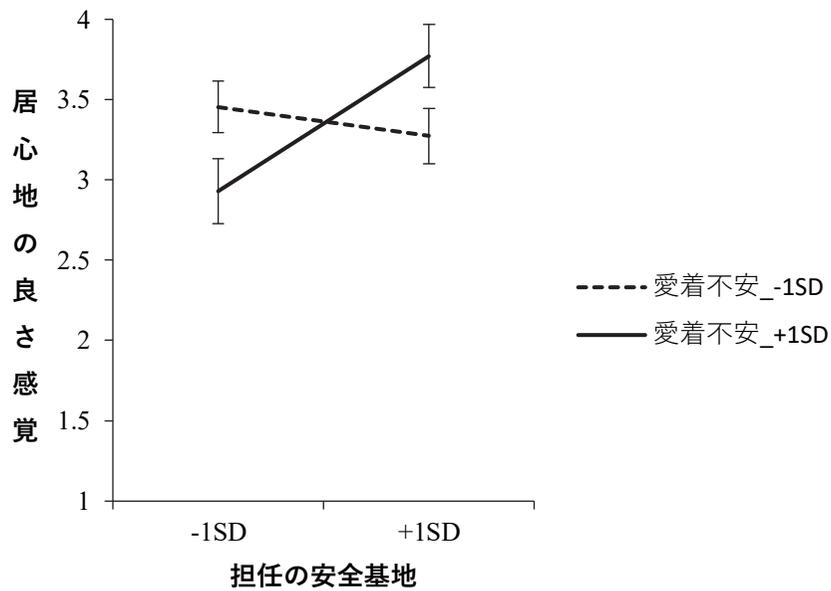


Figure 2 女子の「居心地の良さ感覚」への「愛着不安」と「担任の安全基地」の交互作用

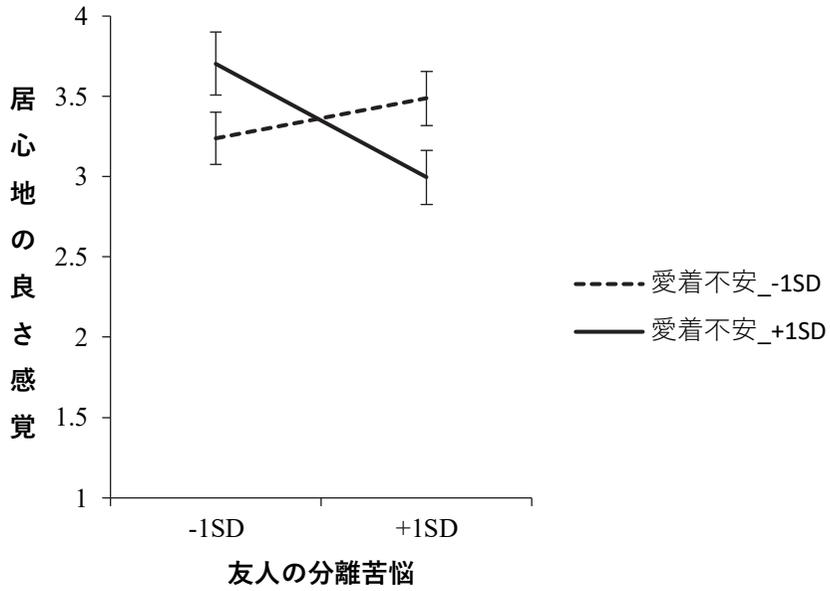


Figure 3 女子の「居心地の良さ感覚」への「愛着不安」と「友人の分離苦悩」の交互作用

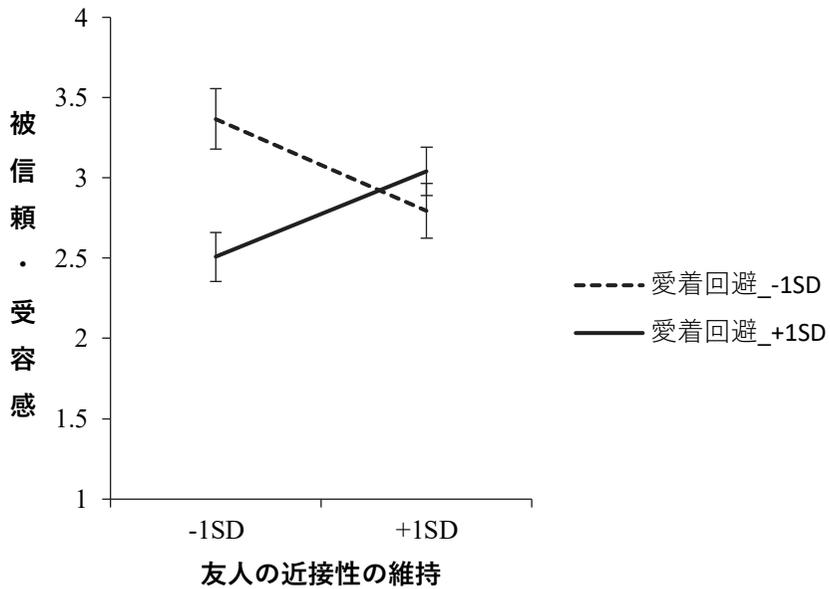


Figure 4 女子の「被信頼・受容感」への「愛着回避」と「友人の近接性の維持」の交互作用

被信頼・受容感に対しては、愛着回避と友人の安全な避難場所の標準偏回帰係数(愛着回避 $\beta = -.203$; 友人の安全な避難場所 $\beta = .237$) が5%水準で有意となった。また、愛着回避と友人の近接性の維持の交互作用項 ($\beta = .449$) が5%水準で有意であったため、単純傾斜分析を行った (Figure 4)。その結果、愛着回避が高い児童は、友人への近接性の維持が被信頼・受容感と有意な正の関連を示した。さらに、愛着回避と担任の分離苦悩の交互作用項 ($\beta = .317$) と愛着回避と友人の分離苦悩の交互作用項 ($\beta = -.315$) も5%水準で有意であったため、単純傾斜分析を行ったが、愛着回避の低群と高群における被信頼・受容感に対する友人の分離苦悩の関連の違いは認められなかった。

充実感に対しては、担任の安全基地の標準偏回帰変数 ($\beta = .348$) が5%水準で有意であった。また、愛着回避と友人の近接性の維持の交互作用項 ($\beta = .476$) が5%水準で有意であったため、単純傾斜分析を行った (Figure 5)。その結果、愛着回避が高い児童は、友人の近接性の維持が充実感と正の関連を示した。さらに、愛着回避と友人の安全な避難場所の交互作用項 ($\beta = -.353$) も5%水準で有意であったため、単純傾斜分析を行った (Figure6)。その結果、愛着回避が低い児童は、友人の安全な避難場所が充実感と正の関連を示した。

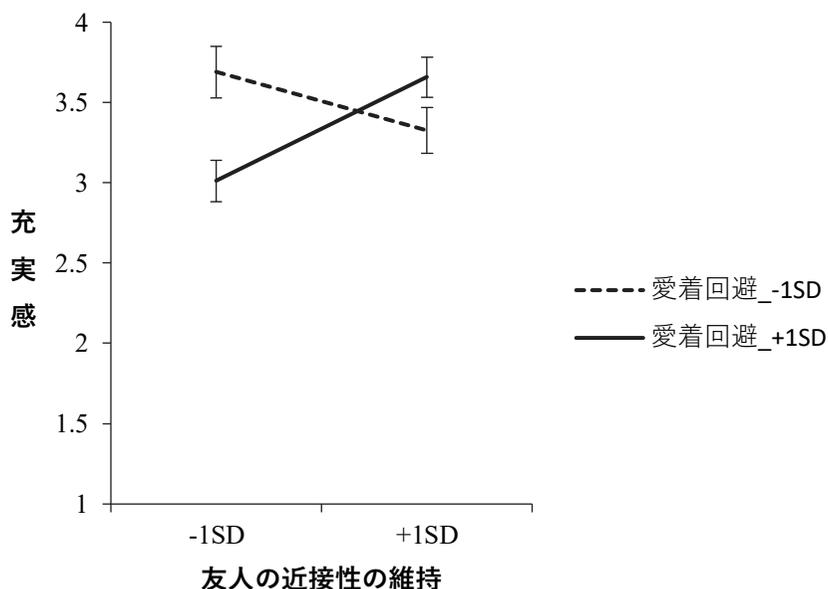


Figure 5 女子の「充実感」への「愛着回避」と「友人の近接性の維持」の交互作用

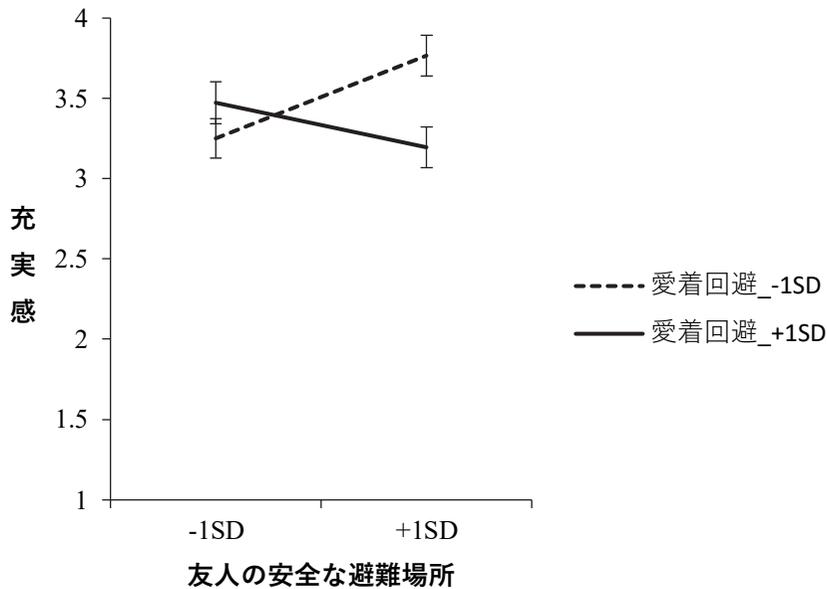


Figure 6 女子の「充実感」への「愛着回避」と「友人の安全な避難場所」の交互作用

4. 考察

本研究の目的は、教師・友人の愛着機能が学級適応感に及ぼす影響について、愛着スタイルと愛着機能の交互作用も含めて検討することであった。

まず、相関分析の結果から、学級適応感の下位尺度である3つについて、愛着機能は男女ともにほとんどの尺度で有意な正の相関を示したことから、単相関としてみたときには今回検討した学級適応感に第一養育者への愛着と担任教師及びクラスの親友の愛着機能が関連していることはいえるだろう。その中でも、男子は担任の愛着機能と学級適応感の相関係数が友人の愛着機能の場合に比べて大きく、女子は友人の愛着機能と学級適応感の相関係数が担任の愛着機能の場合に比べて大きい傾向が見られた。学級適応感との関連は男子では担任教師との関係が強く、女子の場合は友人との関係が強く示されていると考える。これは、中井(2016)の結果にもあるように、女子の方が適応感と友人との関係性が関連しやすいことを示しているのではないだろうか。また、第一養育者への愛着スタイルについてみると、男子は愛着回避と学級適応感の間に有意な関連がみられたが愛着不安には見られなかったのに対し、女子は愛着回避、愛着不安ともに有意な関連が見られた。また、愛着回避との相関係数の大きさを比べても女子のほうが大きくなっていることから、男子よりも女子の方が学級適応感と第一養育者への愛着との関連が大きいと考える。

次に、階層的重回帰分析の結果から、男子はstep1においては学級適応感の下位尺度を説明するのが有意に認められたが、step2において、交互作用項を含めると有意なものが見られなくなった。これは、交互作用項を説明変数に加えたことで、各変数の説明力が分散してしまったためだと考えられる。ただし、10%水準でみると、居心地の良さ感覚に対しての友人の近接性の維持と、被信頼・受容感に対しての友人の安全な避難場所が、有意傾向を示している。このことから、その効果は大きいとは言い難いものの、男子児童については、近くにいたいと思える友人がいるほうが学級に居心地

の良さを感じやすく、困ったときに助けてもらえる友人がいるほうがクラスに受け入れられているという意識につながりやすい傾向にあることが示唆された。

一方、女子は、愛着回避、担任の安全基地、友人の安全な避難場所が有意な関連を示した。愛着回避は居心地の良さ感覚と被信頼・受容感との間に負の関連がみられた。愛着回避の傾向が低いほど、つまり回避という面について愛着が安定しているほど児童は学級に居心地の良さを感じ、受け入れられていると感じるといえる。これは中尾(2020)の愛着回避は愛着不安に比べて学校適応感とより大きく関連するという結果を支持する。その一方で、林田・黒川・喜田(2018)では逆に、中学生では愛着不安のほうが関連しやすいという結果が示されていることから、小学生と中学生では愛着回避と愛着不安の学校適応感との関連の仕方に違いがあるとも言えるかもしれない。

友人の安全な避難場所は被信頼・受容感との正の関連が有意に認められ、これは男子と同様に、困ったときに助けってもらえる友人がいることがクラスに受け入れられているという意識につながっていると考えられる。担任の安全基地は充実感との関連が有意に認められている。これは、担任教師が安全基地として、児童が新しい挑戦や学習に取り組むための心の支えとなることで、それらの挑戦や学習に安心して取り組むことができ結果的に充実感が高まるといえるのではないだろうか。

また、女子に関しては、交互作用項についても有意なものが8つ見られた。以下では、単純傾斜分析で有意な結果が見られた6つの結果それぞれについて考察を述べる。

まず、愛着不安の高い児童は担任の安全な避難場所が高いほど、居心地の良さ感覚が低いことが示された。愛着不安が高いということは、自分が愛されているかどうかに対して不安を抱えているということである。その状態で、担任教師に安全な避難場所を認めるということは、つらく困ったとき、不安になったときに教師に頼りたいと思っていると考えられる。そのような児童ほど居心地の良さ感覚が低くなるのはなぜかを考えると、安全な避難場所という機能を認めているということはそのようなストレスを感じる状況にあるということだと考えることができる。すると、そもそも不安傾向が高い児童はそれによって居心地の良さを低く感じるのではないだろうか。もしくは、逆に不安傾向の高い児童が学級に居心地の良さを感じられていないことで、担任教師に安全な避難場所としての役割を求めようになるとも考えられる。

次に、愛着不安が高い児童は担任の安全基地が高いほど、居心地の良さ感覚が高くなることが示された。不安が高い児童は、何かに挑戦したいときに担任教師が安心できる存在だと思えているほど、そのクラスで安心してその挑戦に取り組めると考えるのではないだろうか。

そして、愛着不安が高い児童は友人の分離苦悩が高いほど居心地の良さ感覚が低くなると示された。不安が高い児童は、離れたくないと思う友人がいると感じるほど、クラスの居心地が悪く感じられる。これは、友人と離れてしまうかもしれないということが不安傾向の強い子ほどストレスに感じてしまい、居心地の悪さにつながってしまうと考えられる。

さらに、愛着回避が高い児童は友人の近接性の維持が高いほど、被信頼・受容感が高くなることが示された。愛着回避が高いということは、低い児童に比べて人との接近を求めないと考えられるが、そのような傾向を持ちながらも一緒にいたいと思う友人がいると感じているということは、それだけそのクラスに受け入れられているという感覚が強いのではないかと考えられる。

また、愛着回避が高い児童は友人の近接性の維持が高いほど、充実感が高くなることが示された。これも、被信頼・受容感と同様に、近接を回避する傾向にありながらも一緒にいたいと思える友人がいるということは、それだけクラスでの生活の充実感が高いといえるだろう。

最後に、愛着回避が低い児童は友人の安全な避難場所が高いほど、充実感が高くなることが示された。愛着回避が低い、つまり回避の面において愛着が安定している児童は、困ったときに助けてくれた友達がいると感じているほど、クラスでの生活に充実感を感じているといえる。

本研究では、教師・友人の愛着機能が学級適応感に及ぼす影響について、愛着スタイルと愛着機能の交互作用も含めて検討した。愛着及び愛着機能の各下位尺度はその多くが学級適応感との相関関係が認められたが、階層的重回帰分析の結果、適応感に関連を示す要因は男女で違いが認められた。特に女子は第一養育者への愛着によって、愛着機能の学級適応感への関連の仕方に違いがみられることが明らかとなった。しかし、今回の調査では調査対象とした児童が、学校数が2校、男子187名、女子197名と限られていたため、結果の一般化可能性には留意が必要である。本研究は横断的な研究であり、たとえば愛着機能が増えることで、その影響を受けて学級適応感が増えるかを仮定した因果関係を示す知見は得られていない点にも留意が必要である。今後、より多くの学校で、対象の児童数を増やして調査することや、縦断的な調査を通して、これらの課題について追究していきたい。

5. 引用文献

- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: vol. Attachment*. London: The Hogarth Press. (ボウルビィ, J.黒田 実郎他 (訳) (1976). 母子関係の理論 (I) 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: vol. 2. Separation*. London: The Hogarth Press. (ボウルビィ, J.黒田 実郎他 (訳) (1977). 母子関係の理論 (II) 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1988). *A Secure base: Clinical Applications of Attachment Theory*. London: Tavistock/Routledge. (ボウルビィ, J.二木 武他 (訳) (1993). ボウルビィ 母と子のアタッチメント 心の安全基地 医歯薬出版株式会社)
- 江村 早紀・大久保 智生 (2012). 小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学校適応感尺度の作成と学級別の検討 発達心理学研究, 23, 241 – 251
- 遠藤 利彦 (2005). 第1章 アタッチメント理論の基本的枠組み 数井 みゆき・遠藤 利彦 (編) アタッチメント：生涯にわたる絆 (pp.1-31) ミネルヴァ書房
- 藤田 亜紀・森口 祐介 (2015). 児童期における教師に対するアタッチメント 上越教育大学研究紀要, 34, 111-120
- 原田 克己・竹本 伸一 (2008). 学校適応の定義—児童・生徒が学校に適応するということ— 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要, 1, 1-9
- 加藤 隆勝・石川 透・田中 祐次・落合 良行・高木 秀明・堀 啓造 (1981). 現代青少年の人間関係と学校適応感—研究の目的・方法— 日本教育心理学会総会発表論文集, 23, 566-567
- 近藤 邦夫 (1994). 教師と子どもの関係づくり：学校の臨床心理学 東京大学出版会
- 林田 美咲・黒川 光流・喜田 裕子 (2018). 親への愛着及び教師・友人関係に対する満足感が学校適応感に及ぼす影響 教育心理学研究, 66, 127 – 135
- 文部科学省 (2019). 平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 文部科学省 (https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm)
- 村上 達也・櫻井 茂男 (2014). 児童期中・後期におけるアタッチメント・ネットワークを構成する

- 成員の検討—児童用アタッチメント機能尺度を作成して— 教育心理学研究, 62, 24-37
- 中井 大介 (2016). 中学生の友人に対する信頼感と学校適応感との関連 パーソナリティ研究, 25, 10-25
- 中尾 達馬 (2020). 児童期におけるアタッチメントと学校適応 救急大学教職センター紀要, 2, 25-30
- 大久保 智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319
- 谷井淳一・上地安昭 (1994). 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192

令和3年10月1日受理

Effects of Attachment Function of Teacher and Friends on Subjective Adjustment to Classroom: With a Focus on Attachment Styles to Primary Caregivers

ISHIZUKA Masaya and KUBOTA Aiko